

ケサランパスランの物語

Tales of Kesaranpasaran

山下 未知瑠 (Michiru Yamashita) 指導：余語 琢磨

第1章 問題関心と研究視角

私たちの「理性」では把握できない不思議な現象や、それに関わる人びとをどう考えたらいだろうか。異界からの来訪者の起源は古い、今も出版物やインターネットなどのメディア、対面の噂話のなかで語られるものは多い。

そこで本研究では、「不思議な存在」のひとつ、1970年代にブームを呼んだケサランパスランを対象として採り上げ、その社会文化的背景を踏まえるために、過去の研究や各種メディアにおける当該現象の表象を遡及的に検証し(第2章)、また、現象に関わった人びとが、どのような思いを持ち、どのように経験したのか、その語りを丹念に聴き取り分析していくことで(第3章)、そのリアリティが生成する過程を再構成すること(第4章)を目的とした。

研究の視角としては、広義の怪異現象を分析的に理解するための鍵概念として小松和彦(2006)が提起した「現象」「存在」「造形」の3つの位相、石井正巳(2009)が柳田國男の『遠野物語』を読み解くなかで示した「場所に生きる物語としての出来事」という認識、飯倉義之(2006)が提起したケサランパスランをめぐる言説と「名付け」の仕組みの3点を軸とし、分析と考察に援用した。

第2章 モノと伝承—ケサランパスランをめぐるテキスト

この章では、まず「物語の始まり」として、近世の著作物『和漢三才圖會』の記述内容と、1930年代に岡本良知が展開したヘイサラバサラの論考群にみる「動物結石」説をたどり、1950年代の『民間伝承』誌上における「毛玉」状のテンサラバサラについての報告とそれをめぐる問答が、おもに柳田國男の発言によって「結石」と同一視されながら定説化していく過程を確認した。

次に、「伝承とそのルーツ」として、各種の報告からたどることができる、宮城県および山形県のケサランパスラン(テンサラバサラ等も含む)伝承の内容を検討した。その伝説群には、関連する禁忌やエピソードについてさまざまな異同があるものの、白または薄茶色の「毛玉」状のモノが現象の核心であることが明らかになった。

「1970年代のメディアへの表出」および「創作物における表現」では、おもに阿蘇(1993)の整理を参考に、全国紙地方版から発信されたケサランパスランの情報が、さらに週刊誌やテレビに採り上げられるようになり、ついに

1980年代にかけて全国的なブームへと発展していく過程を概観した。また、著名化したケサランパスランのイメージは、創作物や商標などに取り込まれるとともに、現在もWeb上を中心に多くの語りを生成していることが理解された。

第3章 ケサランパスランの物語—インタビュー資料から

この章では、①伝統的な「毛玉」伝承が残る、宮城県気仙沼市階上や山形県鶴岡市温海と中心とする地域においてケサランパスランに関わりをもった人びと11名と、②メディアを通してケサランパスランを知り、それとの出会いを得たと称する首都圏在住の人びと4名の、ケサランパスランとの出会いや思いについての語りを、詳細に紹介しつつ整理と分析を試みた。

①には、先祖からの「受継ぎ型」と自分が新たに捕まえた「発見型」、さらに自分では所持しないものの探求心から地の利を活かした「調査型」がある。②は、総じて「都市伝説型」とでもいうべきもので、当初の情報が断片的で、空想なのか事実なのかわからないまま自然に受け入れていくなかで、ケサランパスランと遭遇している。

第4章 考察

前章①のうち受継ぎ型には、おおむねケサランパスランに期待せず、その存在は日常に埋没し淡々と祀るという共通の態度がみられた。発見型は、ケサランパスランの科学的説明を積極的に支持し、その伝承的物語世界については冷静に受け止めるが、周囲に面白がってもらえるよう展示するなどの傾向がみられた。調査型は、物語世界と信仰を客観的に尊重するものの、あくまでその存在を科学的に解明し情報発信することに重点をおいている。

②は、周囲の人たちと積極的にケサランパスランの情報を分かち合ったり伝えたりせず、個人的な想像の世界に気軽に遊ぶと同時に、宗教的な聖性や畏怖感は遠ざける傾向にある。科学的理解は前提とするものの、むしろその説明に息苦しさ・物足りなさを感じ、積極的にケサランパスランの伝承的物語世界を求めていることがうかがわれた。

結論として、これらのケサランパスランをめぐる種々の語りは、いくつかの支配的なドミナント・ストーリーと、語り手自身の「出来事」や「生きられた経験」のせめぎ合いのうちに生じていることを明らかにした。